



同時期に派遣されていた隊員たちとサッカークラブをつくり、地元のシリアの若者と試合を通じて交流

夢を抱いて飛び込んだ 新しい世界

タイの首都バンコクにある国連食糧農業機関（FAO）のアジア太平洋地域事務所。ここで、FAO事務局長補／アジア太平洋地域代表兼事務局長を務めるのが小沼廣幸さんだ。FAOは、食料と農業分野での貢献により、貧しい人々の持続的生活の改善を図り、世界から貧困や飢餓、栄養失調を撲滅することを目指す国際機関で、世界各地に事務所

国際協力の 第一線で活躍し続けて30年

30年にもわたり、国際機関で働き続けてきた小沼廣幸さん。彼のキャリアの出発点は、青年海外協力隊。今なお、その経験は生き続けている。

国連食糧農業機関（FAO）事務局局長補／
アジア太平洋地域代表兼事務所長

小沼 廣幸さん

技術を教えるためにここに来たんだと高慢な態度をとる前に、相手から学び、理解しようとする謙虚さが大事だったのです。

協力隊で培った経験を礎に 積まれたキャリア

協力隊の任期を終えた後、小沼さんは国際機関でのキャリアを重ねていく。80年に国連アソシエイト・エキスパート制度（APO）※でFAOの畜産専門家に任じ、南イエメン（現イエメン）に赴任、さらに83年、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に採用され、約8万5000人の難民を収容していたソマリアのジャララクン難民キャンプで所長を務めた。85年からはFAOのアフリカ地域事務所（カーナ）に4年、ローマ本部に7年、バングラデシ事務所長4年、アジア太平洋地域事務所（タイ）と、FAOで着実にキャリアを積んできた。国連機関で働く一番のやりがいは、中立的な立場に立って国際的な政策レベルの決定に直接貢献できること。「ただ、立場が大きくなればなるほど自分の言動が国際的な影響力を持つので、やりがいがあると同時に責任も感じます」。

現在、FAOがアジア・太平洋地域で実施しているプロジェクトは600（700件。農業政策への助言、食料増産事業、貧困削減に向けた農家の自立促進、環境保全・気候変動対策など多

を持つ。その一つであるアジア太平洋地域事務所が1947年に設立されて以来、小沼さんは初めての日本人の代表として2010年に就任。現在、44カ国の加盟国を抱えるFAOアジア太平洋地域の最高責任者として、同地域での事業の統括や、約70人の国際専門家と約200人の職員を擁する事務所の管理を一手に引き受ける。

小沼さんが世界を舞台に働き続けて今年で足かけ34年を迎える。その出発点となったのが、青年海外協力隊への参加だった。「大学で農学を学び、酪農家を夢見ていたんですが、酪農経営が難しい時代で夢をあきらめざるを得なかった。そんな時、ちょうど知り合いから協力隊のことを聞き、「酪農ができるなら」と応募しました。日本では無理でも、途上国に行けば夢がかなえられるという漠然とした期待を抱いて」。そして77年、小沼さんは畜産分野の隊員としてシリアへ向かった。

当時、シリアには東欧の近代的大規模酪農の経営を取り入れた7つの大型国营酪農牧場があり、小沼さんはそのうちの1つに配属された。本来なら現地の技術水準に見合った小規模な技術から積み上げていくべきところ、シリアは酪農の経験が浅いにもかかわらず、一挙に大規模な酪農設備が導入されていた。だが当然ながらその設備を使いこなせる人材は乏しく、牧場経営そのものが行き詰っていた。

そこで小沼さんは、家畜飼料の改良や乳牛管理のシステム化、搾乳方法など、酪農技術の基礎を1から指導。技術者たちを率いていくことが重要だと考え、自分が持っている技術を実践していった。ところが現実には厳しかった。国营の酪農牧場だったこともあり、経営改善を図ろうという技術者たちの意欲が思うように高まらない。「技術を伝えるには、学ぼうとする側に心を開いてもらい、信頼関係を築いて初めて成功するという教訓を得ました。自分が



今から34年前、青年海外協力隊員として活動したシリアの酪農牧場で、牛の健康状態をチェックする小沼さん



2010年9月、30回目を迎えたFAOアジア太平洋地域会議でスピーチを行う小沼さんはFAOのタイ代表としての立場も担う